

カタカナ語の増殖

オピニオン

NHKのテレビ放送で分かりにくい外来語が多用されたとして、精神的苦痛を訴えた男性がいた。確かにカタカナ語は増えているが、今の時代なら当たり前……なのだろうか。

過剰な英語化、無味乾燥



35年生まれ。「フランス語の未来」協会の創設に参加し、仏語圏の関連団体と協力。仏国立行政学院を経て外交官となり、駐ドミニカ大使などを歴任した。文学博士。

アルベール・サロンさん
「フランス語の未来」協会長

日本人の中に、英語を中心とする外来語の乱用に異議申し立ての声があることに勇気づけられる。私たちは、米国主導で英語が世界の言語の覇権を握ることに反対する活動を続けてきた。反米主義を掲げているのではなく、フランス語を守り、文化の多様性を守る闘いだ。

私たちの活動の舞台骨になっ
ているのは、1992年の憲法改正だ。欧州連合(EU)の設立を決定し、統一通貨ユーロの導入目標を定めたマーストリヒト条約をフランスが国民投票で批准承認した年だった。

条約に合わせて改正されることになった憲法に、フランス語を守るための一文を加えようという国會議員に働きかけた。その結果、第2条に「共和国の言語はフランス語である」と明記されることになった。

もあつたのだろう。
しかし、94年に制定された法律のおかげで、教育言語として英語を定めたという法案を骨抜きにすることができた。私たちは大学教育が「英語化」すれば、いずれ、初等教育にも広がりかねないという警告を發した。誤解してほしくないが、外国語を学ぶことに反対しているのではない。私自身、英語、ドイツ語、スペイン語など複数の言語を話す。外交官時代、英語で講演したこともある。

問題なのは、他の言語をのみ込むような過剰な英語化の動きだ。一つの言語が他を支配することになれば、モノの考え方も単一になり、無味乾燥になってしまう。科学の分野でもフランス語や日本語、ドイツ語で考える人もいるからこそ、互いが刺激し合って大発見を導き出したのではないか。

日本はフランスと異なり、戦後、憲法を改正していない。それだけに、憲法に「日本の言語は日本語である」と明記されるとしたら、日本人は計り知れない衝撃を受けることになるかもしれない。母国語を守ることにこそ、国家の独立を守ることにつながると信じている。

(聞き手 稲田信司)

「言語法」で日本語を守れ



50年生まれ。専門は英語支配論、言語政策。言語を権力や安全保障の観点から論じている。著書に「英語支配の構造」「日本語防衛論」「日本語を護れ！」など。

津田 幸男さん
筑波大学教授

外来語やカタカナ語の氾濫は目にあまる。日本人は、自分たちの言葉を大切にすることを忘れてしまったのでしょうか。これは誇りと威信の問題です。先日、全日本柔道連盟の新しい会長が会見で、「ガバナン」という外来語を使っていた。なぜ日本語を使わないのか。日本のよき伝統を守るはずの、柔道界の最高責任者なら、日本語に言い換えるべきです。

私は日本語防衛論を唱えています。日本人は外来語をあまりに無防備、無神経に取り入れ過ぎる。背景には「英語を使ったらカッコいい」という、日本人特有の英語信仰があります。日本人は英語を上に、日本語を下に見て、自分たちの言葉の威厳を自らおとしめています。氾濫の元凶は4者います。まず企業。商品名や社名、宣伝、

し、翻訳が大事です。翻訳により外国語の要素が薄まり、国風化できるし、人々にわかる日本語を作れるからです。
しかし、現状は野放しです。洋画の題名も訳書の書名も外来語だらけです。なぜ「ライ麦畑でつかまえて」の新訳が「キヤッチャー・イン・ザ・ライ」になるのか。
ちゃんとした日本語の単語があるのに、外来語を使うことも多い。たとえば、「モチベーション」。これは「やる気」と言うべきです。このままだと「やる気」という日本語が英語に置き換えられるかもしれません。
外来生物の侵入で在来生物が危機になるのと同じです。無自覚で、あるいはいい気分だけで外来語ばかり使っていたら、いずれ日本語が丸ごと英語に置き換えられてしまうかもしれません。
だから、野放しには反対です。まずは言い換えを奨励し、極力、日本語を使うよう促すべきです。

それでもだめなら「言語法」の制定を検討すべきです。外来生物にはすでに「外来生物法」で対応しています。ことばについても日本語の威信と地位を守る「日本語保護法」などの法律が必要だと考えます。(投稿)

取り込んで、面白がろう



56年生まれ。電通勤務を経て、99年に独立。NTTドコモ、キャノン、大和ハウス、サッポロビールなどのCMを手がける。

岡 康道さん
クリエイティブディレクター

1956年生まれなので、物心がついた時は家にテレビがあつて、ニュース、ドラマ、アニメ、コマーシャル、アナウンサー、タレントなどカタカナ語があふれていました。カタカナ語の少ない日本語の世界を知らないからかもしれないですが、これまでカタカナ語を不快と感じたことはありませんでした。

30年以上仕事をしている広告業界は元々、米国で発展した言葉なので、英語に由来する言葉があふれています。キャンペーン、クライアント、コンテンツ、ターゲット、オリエンテーション、プレゼンテーション、トリガーなど、身の回りの言葉はほとんどカタカナ語です。これらの言葉の出自は外国語ですが、僕にとっては純然たる日本語の一部です。

「小さくても巨船の針路を正す仕事をしたい」という思いを込めて社名を「タグポート」としました。「曳き舟」でもいいのですが、それでは仕事がありません。来ないだろうと思つたのです。言葉は日本人全体によって、日々ふるいにかけられていて、ダメなものは消え、魅力があるものが残っていくのです。「日本語を守れ」と、権力や権威を背景にして、言葉の使い方を統制するようなことをすれば、すごくよくなることが起きるような気がします。

「日本語を守る」と言っても、そもそも私たちが使っている漢字も中国から来たものだし、ひらがなやカタカナも漢字をくすしたり、漢字の一部を取ったりして作ったものです。日本語は元々、様々な言葉を外から取り込んで同化させてきた包容力の大きい言語です。

カタカナ語は、出自は外国語でも本来の外国語の意味から離れて使われて、日本語の表現を豊かにする役割も担っています。「じゃじゃじゃ」のような方言を再発見して楽しむのと同様に、カタカナ語も新しい日本語表現として面白がって使っていくべきではないでしょうか。(聞き手 山口菜)



グラフィック 山本 美雪